

---

# 想いを伝えて

伽砂杜ともみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

想いを伝えて

### 【Nコード】

N5387F

### 【作者名】

伽砂杜ともみ

### 【あらすじ】

小さな村の、大きな大きなモミの木は、いつも静かに村をみつめていました。イラスト小説企画『小説風景12選』<12月>参加作品です。

(前書き)

イラスト小説企画『小説風景12選』<12月> 参加作品です。

小さな村から少し離れた場所に、小さな丘がありました。  
その丘には、大きな大きなモミの木が、いつも村中を静かにみまもっています。

春のお祭りでは、子供や女たちが着飾り、花冠をかぶって歌をうたい、華やかに踊る。

夏には、村人たちがみんなでお酒やバーベキューで大騒ぎ。

秋になれば、収穫物を集めて、豊作を祝う。

そして冬。クリスマス前に大人たちがモミの木を飾りたて、一緒に聖誕祭を過ごす。

大きな大きなモミの木は、誰からも愛されていました。

長く長く続いている戦争の火の粉は、そんな平和に暮らしている小さな村も、見逃してはくれませんでした。

若い男たちは兵として村を出ていきます。

断れば、村ごとなくなってしまうかもしれない。と、小さな村をまもるために出ていきます。

残された者たちは、戦闘機の音におびえながら戦争をにくみ、その戦争を終わらせる気のない国をにくみました。

そして空をみあげては、同じ空の下で戦っている愛しい人たちの想い、涙しました。

しかし、それでも季節はめぐります。

老人や女、そして子供たちも手伝いながら畑をたがやし、生きるために作物を育てなければなりません。

大きな大きなモミの木は、同じ場所で同じように村をみおろしていましたが、口数が少なくなってしまった村人たちは、モミの木を振り返ることも笑いかけることもありませんでした。

冬が来て、モミの木にクリスマスの飾りをつけることに、反対する人が出てきました。

老人たちでは、大きなモミの木にのぼることは、危ないということです。

女たちは、残念がる子供たちを想い、男たちがしているような大きな飾りつけは出来ないけれど、自分たちで苦労して飾りつけました。

大きな大きなモミの木が、帰ってこない男たちに見えるように。

誰もいなくなり、静かになったモミの木の下に、少女が一人やってきました。

きれいに着飾っているモミの木を抱きしめて、泣きました。

戦争に行ってしまった父が、よく連れてきてくれては、話してくれました。

「この大きなモミの木は、どんなに遠くの木ともお話が出来るんだよ。とても遠くの木に用事がある時は、他の木が協力して伝えてくれるんだ」

戦争に行ってしまった父に、ずっと聞かされていた、モミの木の話。

少女は、そのとき父からもらったペンダントをにぎりしめます。

どうか。どうか大切な父に伝えて。

無事に戻ってくることが出来ますように。と、モミの木に祈りを

伝えました。

少女が帰った小さな丘に、少年が一人やってきました。  
綺麗に着飾ったモミの木の下に、赤い花を一本置きました。

少年は、きれいなモミの木をみあげます。

戦争に行ったお兄ちゃんのそばに、木があるのなら。モミの木よ、  
伝えてほしい。

お母さんがお兄ちゃんのことを心配しているよ。病気は、どんどん悪くなる。

ぼくじゃ、ダメなんだ。早く帰ってきて。どうか、どうか無事に  
帰ってきて。

少年は、しばらくモミの木をみあげていましたが、モミの木はひ  
っそりと静かにみおろしてくるだけ。

暗くなってきた夜空には、星が悲しそうにまたたきます。

冷たい風は、なぐさめるように少年の顔をなでました。

ひんやりとした風に、少年はあふれてきた涙をぬぐいました。

少年はマフラーで鼻から下をかくしながら、暗闇に包まれる前に  
帰らなければと振り返りました。

たくさん的小さく揺れるオレンジ色の光が、モミの木に向かって  
進んできます。

少年はみんなが自分を心配して探しにきたのかと思いました。  
しかし、その光は列を作っています。くずれることもあるけれど、  
ならんでいます。

その光をながめて、少年は立ち止まりました。  
おこられることはない。と、確信に近い思いをもって、みんなを  
待ちました。

村長のお爺さんが、少年をみつけて抱きしめました。

そして、ランプを手に持った村人たちは、小麦の入った袋や花、いろいろな物をモミの木にささげていきます。

みんなはそれぞれ、モミの木にさわったり、抱きしめたりしながら泣きました。

モミの木を囲み、手をつないで。古くからお祭のたびにうたってきた歌を、涙で声にならないながらもみんなでうたいました。

届け。届けと、心を込めて。

愛しい人へ、想いを込めて。

モミの木は、ざわりと音をたてました。

北風が葉を揺らしたのかもしれない、リスが声を聞いてのぞきにきたのかもしれない。

でも、村人たちは大きく喜びの声をあげました。

お願いしますと声をそろえて。

夜が明けても、戦争は続きます。

しかし、村人たちの顔は不安に暮れるだけでなく、明るく顔をあげている人が増えました。

つらいことだらけの村の中で、それでも笑顔が増えました。

小さな村の小さな丘に、大きな大きなモミの木がありました。

村人たちの移り変わりを、むかしから見てきました。

なにをするでもなく、なにかができるわけでもなく。ただ変わらず静かに。

悩みも、怒りもよく聞いてきました。

結論は出せなくても、みんな満足そうに帰っていきます。

しかし、寒い日の夜は村人たちのようすが違いました。

みんなが涙を流し、モミの木に想いをたくしてきました。  
静かに聞いていたモミの木は、周りの木々に、村人たちの想いを  
伝えました。

木々は戦争を止めることなどできません。

木々は人間のように言葉を話せません。

しかし、伝えることはできるのです。男たちが木を見て、故郷を  
思い出すたびに。少しずつ想いは伝わるのです。

戦場にかり出された男たちは、実際に木を見ては大きなモミの木  
を思い出し、故郷に残された者たちを想いました。

無事で帰る、絶対に。絶対に。

そしてモミの木は、その想いを伝えるように、大きくせいっぱ  
い枝葉を揺らしたのでした。



（後書き）

読んでくださって、大変ありがとうございます！  
これからも、もっと頑張ります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5387f/>

---

想いを伝えて

2010年10月8日14時18分発行